

第71回年次大会の仙台開催奮戦記

須藤 彰三* 〈東北大学大学院理学研究科 suto@surface.phys.tohoku.ac.jp〉

第71回年次大会を、2016年3月19日から22日の日程で仙台・東北学院大学泉キャンパスを会場として開催しました。今後に役立てられればと思い、実行委員長の目に見えてきたこと、準備から開催までを振り返ってみました。また、舞台裏を見ることで、皆さんの学会に参加する意識も変化するかもしれません。意外なことが多く起きました。参加した皆さんからは、「会場の配置がコンパクトで、移動しやすく講演を聞きやすかった」、「講演会場が広がった」、そして「体育館の1フロアで、ポスター発表、企業展示、設立70周年・創立140周年記念展示があり、参加しやすかった」等の好意的な感想が聞こえてきました。一方、「宿が取りにくかった」、「会場が遠かった」、「食堂が割高だった」等の指摘も聞かれました。

始まりは、4年前、2012年6月のメールでした。事務局担当者から仙台開催を打診されたことに始まります。春・秋の大会での講演が、大学院生の教育にとっても重要であること、私自身、学会の講演・交流を通して研究・教育活動を発展させてきたことが脳裏をよぎりました。これは引き受けないといけないと判断しました。その判断の背後には、2003年の第58回年次大会を東北大学と東北学院大学の共催で開催した経験があり、比較的容易に開催できるのではないかという見通しがあったからです。加えて、2016年春は東日本大震災後5年目を迎えることとなります。皆さんに復興の様子を見ていただき、周りの方々に報告して欲しいと思いました。

“思い”と“現実”は、常に相反するもののようです。早速、東北大学の1・2年生約5,000名が講義を受ける川内北キャンパスで使える部屋数を調べてみました。驚きです。全く足りないことに気づきました。物理学会の年次大会は延べ6,000名、1日当たり2,000名の参加をめどに設計しています。悠に間に合いそうなのですが…。不思議に思って調べてみると、2009年に大規模改修があり、100名程度の中教室の多くが49名定員の小教室に改修されていました。小人数教育の流れです。急いで、東北学院大学、宮城教育大学とも連絡を取り、開催可能性の検討を始めました。いくつかの可能性の中で、過去に他学会の開催実績がある、東北学院大学教養学部泉キャンパスで開催する方向で調整を図ることにしました。

2014年1月、中心となって計画した星善元（東北学院大工）、坂本泰伸（東北学院大教養）、村上弘志（東北学院大

教養）、それに私の4名で集まり実施計画を打ち合わせました。星先生は前回の仙台大会での副実行委員長、村上先生は2009年第64回年次大会（立教大学）の実行委員の経験があり、とても頼もしく感じました。これ以後、この3名の先生方には、東北学院大学本部・事務局と開催日程、使用する部屋の予約、使用料の交渉、東北学院大学から実行委員の依頼等、大会運営のほとんどをお願いすることになります。実行委員会には、宮城教育大、東北大多元研、東北大金研からも参加をお願いしました。物理学会東北支部活性化のためにも、この機会に、できるだけ仙台の物理ネットワークを広げておきたかったのです。

そうこうするうちに、事務局から「年次大会・（秋季）大会等準備マニュアル」も送られてきて、後は順調に進むかと思われました。先ず決めなければならないのは、開催日程です。東北学院大学の学事歴と合わせて、大会設備の荷物搬入は3月17日（木）午後、会場設定は18日（金）、会期は3月19日（土）から22日（火）に決定しました。併せて、通常3日目に設定されている総合講演を2日目に実施することにしました。20日（日）午前中は、礼拝のため大学に入構できないからです。

次は、宿の手配をお願いする旅行業者の選定です。事務局の担当者が業者に連絡し、2014年5月に泉キャンパスで選考面接を行いました。その少し前に、3月18日（金）から20日（日）まで、日本循環器学会が仙台で開催されることが分かりました。大会は10,000名規模で、物理学会6,000名の倍近くです。全く注意していませんでした。従来、仙台では東北学院大学と東北大学以外で6,000名を超える研究集会はできませんでしたが、仙台市が国内外の大きな会議誘致に積極的に動き出していました。仙台国際センター増築を計画し、2015年3月に16万5千人規模の国連防災会議、2016年3月に循環器学会、同5月にG7財務相会議と戦略を練っていました。

旅行業者選定の面接には、JTB、東武トップツアーズ、近畿日本ツーリストの3社から応募がありました。案の定、既に循環器学会と契約しているJTBは、仙台市内に十分な部屋数は確保できないと回答してきました。今回は、約1,000室を確保していただいた東武トップツアーズをお願いしました。この辺の経緯が情報として、「仙台には宿がない」と皆さんに流れたのではないかと思います。仙台市内には、ホテル客室が約15,000室、旅館の客室約2,700室があり、横浜市とほぼ同数の部屋があります。最終的に、物理学会のサイトを通して、1日当たり約1,400名の方々

* 実行委員会委員長

の予約を受け、会期中に宿泊していただきました。一時予約が難しくなった時期もありますが、開催1か月前には空きができました。急いで、期間中に一つのホテルに連泊できるように東武トップツアーズに作業を進めていただきましたが、どの程度改善されたのでしょうか？ いつもより1か月早く学会誌に宿泊案内を掲載していただいたのですが、もう少し効率的に宿泊予約ができるシステムはないのでしょうか？

ようやく、会場、宿泊のめどが立ち、2014年9月の物理学会理事会で正式に開催の承認をしていただきました。実行委員会を22名の方々にお願いし、大会準備マニュアルに従って、職務を分担しながら進めました。講演会場、総合受付、本部・アルバイト控室、託児室、ポスターセッション会場、総合講演会場、市民科学講演会会場、Jr.セッション会場等の検討と決定を順次行っていました。事務局大会担当の方々3名にも順次、参加していただき、2015年2月に施設見学と1年前打ち合わせ、3月に早稲田大学での第70回年次大会からの引き継ぎ、10月には半年前打ち合わせ、大会Webも立ち上げました。12月の3か月前打ち合わせ、2016年2月の最終打ち合わせを経て、開催に漕ぎつけました。

17日の設備搬入、18日の会場設定、そして学会期間中の運営に関して大きな力を感じたのは、36名のアルバイトの方々です。いつもは、物理学科を中心に募集するので男子学生が多いのですが、今回は教養学部の学生で約半数が女子学生でした。17日午後、5トンコンテナで、ポスターボード約150枚が届いた時には、とても大きな壁のような重さを感じました。アルバイトの学生が一番驚いたのは、ドレスコードがないことだったようです。物理学会にはいくつかの美学があります。服装もその一つで、「形式にとらわれず、自由な雰囲気の中で、本質的な成果を議論する」ことは、驚きだったようです。私も学生時代に、物理学会のアルバイトとして働きました。当時は講演会場の中でのタイムキーパー役もあり、学生ながら、分かりやすい発表とそうでない発表のスタイルを感じながらベルを鳴らしていた記憶があります。

19日、いよいよ大会初日です。早朝、小雨が降っていたこともあり、うまく滑り出せるように、本部には緊張感がありました。経験豊かな事務局担当者が大会運営および総合受付の指揮を始めました。実行委員全員も持ち場に散っていきました。私は、本部の総合受付の見渡せる位置に席を見つけ、窓から参加者の皆さんの動き、大会の流れが滞らないように注意を払っていました。8時前に到着する方もおりました。バスが着く毎に大勢の集団が総合受付、会場の中に消えていきました。歩く方も多くおられました。プログラムに掲載した地図には、地下鉄駅から歩けるように目印を入れました。9時には、共同通信社の取材も入りました。そのようにして1日目は、大過なく過ぎました。

20日、午前に総合講演、午後には市民科学講演会が開催

されました。現地実行委員会には、市民科学講演会の企画が任されています。総合講演は、理事会企画です。2015年4月にニュートリノと重力波観測の二つの話題を選びました。東北大学の実験施設も同じ神岡鉱山地下にありますが、仙台市民が聞いたことがなく、興味を持ちそうな話題と考えました。驚きです。10月には梶田隆章先生がノーベル物理学賞を受賞しました。加えて、2016年2月12日に米国のLIGOグループが、初めて重力波を観測したとのニュースが飛び込んできました。梶田先生には急遽、午後の市民科学講演会での講演もお願いすることになりました。会場には約500名の市民が集まり、そのうち50組程度の親子連れが参加してくれたのが印象的でした。終了後、その親子連れ一人一人に、梶田先生が握手し、サインし、笑顔で写真に納まっていたことにはとても感謝しています。この中から、次の物理学を支える研究者が生まれることを期待したいものです。

21日、Jr.セッション開催日です。実行委員会では、大会準備マニュアルの指示の他に、仙台独自の“おもてなし”をできないかと考えていました。そんな折、Jr.セッションの会場として、礼拝堂を使わせていただくことができるようになりました。礼拝堂には、とても大きなパイプオルガンとスタンドグラスがあります。そこで、大学オルガニスト、教養学部教授の今井奈緒子さんに演奏会の開催をお願いし、快く引き受けていただきました。パイプオルガン特別演奏会は、第一部（一般向け）13:00-13:30、第二部（Jr.セッション参加者向け）14:20-14:40が行われ、第一部は200名程度、第二部は300名程度の聴衆が、独特の音色に酔いしれていました。

22日、あつという間に最終日です。窓の外に、スーツケースを抱え、忘れた人を探している東武トップツアーズの女性係員を見つけました。しばらくすると本部に届けられました。大会期間中、傘、PCの変換ケーブル、ポスターのケース、デジタルカメラ、飲みかけのペットボトル等多くの忘れ物が届けられました。律儀に、物理学会では、半年間保管することです。お昼には、第72回年次大会開催予定の大阪大学の実行委員と引継ぎを行いました。午後には、撤収作業が始まりました。

参加された皆さんは、今回の学会でどのような成果が得られたのでしょうか？ どのように感じられたのでしょうか？ すべてボランティアで運営し、経費削減のために、構内のバスなどの交通整理も実行委員で行いました。

前回の仙台大会（2003年3月）の総合講演は、前年ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊先生だったのを覚えている人はいるでしょうか？ 今回の仙台大会の総合講演は、昨年ノーベル賞を受賞した梶田隆章先生でした。この次仙台で開催するときには、また会員のどなたかがノーベル賞を受賞することを期待して、筆を置きたいと思います。

（2016年5月24日原稿受付）